特集　あなたの大切な人が認知症になったとしたら…

認知症の方との関わり方を考える

急速に進む高齢化。本庄市においても、人口の約3割が高齢者です。そして、高齢化が進むとともに、認知症の方も増えています。

「認知症になったら何も分からなくなってしまう」、「今までできたことが、できなくなる」、「認知症の介護って大変そう」、「認知症になったらどうしよう」というように、認知症について漠然とした不安や恐れのイメージを聞いたり、持ったりしたことがありませんか。

今回の特集では、認知症の方が共同生活を送る介護保険施設の職員と、認知症の方とともに活動するオレンジカフェの運営者へのインタビューを通して、認知症の方との関わり方を考えていきます。

★高齢者福祉課　☎25-1722

ひとりの人として関わる

認知症対応型共同生活介護施設（グループホーム）で働く原田さんに認知症の方と関わる中で感じていることを伺いました。

認知症対応型共同生活介護施設（グループホーム）とは

認知症の方が、食事や入浴等の支援を受けながら、家庭的な環境と地域の方との交流の中で共同生活をすることが特徴な介護保険施設です。

原田　和弥　さん

グループホームの管理者・介護職である傍ら、キャラバン・メイト（認知症サポーター養成講座の講師）として、認知症に関する理解の普及にも積極的に取り組んでいる。

認知症になると何も分からなくなる？

介護に携わる原田さん自身、この仕事を始める前は認知症になると何も分からなくなるものだと思っていました。「入社初日、プリンを皿に出して欲しいと頼まれ、右も左も分からず慌てて目の前の皿に出したところ、食後にあの皿はサラダを食べた後の皿だと怒られました。そのとき認知症だからといってすべて忘れるわけではない。ちゃんと覚えているし、失礼な事をされたら怒る感情だってある、と気づきました」。

また、認知症になったから何もできなくなるわけではなく、共同生活の中で職員や他の利用者の手伝いをしてもらうこともあります。食器を拭いたり、洗濯物をたたんだり、時には一緒に買い物に行くことも。「私のズボンの破れを直してもらったこともありましたし、その後シャツのボタンがほつれた時に、また直してあげると声をかけてもらった事もありました。人のために何かしている時の表情は、キラキラ・いきいきしているように見えます。人から必要とされる、感謝されることが、本人の希望につながっていくのかなと感じています」。

みんな同じひとりの人

帰宅願望という言葉を聞いたことがあるでしょうか。一般的に家に帰りたいという訴えや行動をとる事と言われています。

「私、認知症の方に対して『帰宅願望』って言葉が使われるのが好きじゃないんです」。原田さんは笑いながら続けます。

「私たちだって疲れたり、不安になったり、夕方になったら家に帰りたくなるじゃないですか。それと同じだと思うのです」。認知症のために、帰りたい理由をうまく表現することが難しいだけで、感じている不安や思いは私たちと一緒です。

また、その不安や考えの表し方も人それぞれです。どうしたら不安を和らげたり、不安を感じる時間を短くできるのか、対応の仕方も一人ひとり違う点も認知症介護の難しいところです。

「まずは『認知症の人』ではなく、ひとりの人として、変に構えず接して欲しい。骨折して歩けない方に手を差し伸べるのと同じように、認知症の方にもできることできないことがあって、できない部分をサポートするってだけなんじゃないかな」。